



日本近現代史と日本思想史研究の第一人者。著書に「歴史で考える」(岩波書店)など。

米コロンビア大学教授 キャロル・グラックさん(75)

まず、平成になって、日本人と曆の關係が大きく変化した。人びとは、元号、西曆、年代(1960年代、90年代)そして「戦後何年」という4種類の曆をごく自然に重複させ、ミックスさせながら、矛盾なく使っています。もう元号は、昭和までと同じ存在ではないといえます。

元号と日本人の關係が決定的に違っています。かつてのような元号と西曆をめぐるイデオロギー対立はみられず、ほとんどの日本人は、便利に曆を使い分けるようになりました。さらに、明治や昭和を考れば分かりますが、元号

は天皇と非常に強く結びついていた。以前の日本人の意識では、天皇は元号と時代の中で中心的な位置を占めていました。

しかし、平成は違うようです。今の天皇の性格や言動も、ある程度は影響しているかも知れませんが、それだけではなく、日本人の意識に根本的な変化が起きたのです。平成の次の時代も、明治や昭和のように天皇が再び中心になるといえることはないでしょう。

この変化は、今の天皇の生前退位を、国民の圧倒的多数が支持したことから明らかになりました。皇位継承や皇室典範に関して、

保守的な姿勢をとりたかったはずの安倍政権も、こうした世論を無視することは不可能でした。

では、平成の30年間は、どんな時代として後世に記憶されるのでしょうか。政治改革が叫ばれ、政権交代もありましたが、政治的なことで記憶される時代ではないように思えます。

激動の時代としてでもなさそうです。不況、失われた10年、度重なる自然災害、オウム真理教などの事件、格差の拡大などがありました。朝日新聞の世論調査で、3分の2以上の人が「明るい」か「どちらかといえば明るい」時代だととらえていることは驚きでした。

ある時代の歴史的な性格やアイデンティティーは、その時代が終わってから定まるのが普通です。平成がどんな時代だったかは、これから起こることで、決まってくるでしょう。

(聞き手・池田伸章)

◆大久保、高久、池田のほかに藤原秀人と三浦俊章が担当しました。